

送り火 今年も規模縮小

連合会、昨夏の形を軸に実施 状況次第で火床増検討も

昨夏の五山送り火で火床6
点にだけともされた大文字
(2020年8月16日夜)



もある。

昨夏は午後8時から「大文字」(京都市左京区)で文字の交点と先端の火床計6カ所に一斉に点火した。続いて「妙法」(同)と「船形」(北区)、「左大文字」(同)で各1カ所、「鳥居形」(右京区)では2カ所がともされた。

今夏もこの形を軸に「昨年同様、規模を縮小した送

り火行事」に取り組むという。お盆を迎えた祖先の霊を送り返す行事は、各保存会で催す。連合会は「来年こそは新型コロナウイルスの流行が終息し、通常通りの送り火を行えるよう祈念している」としている。

一方、送り火は江戸時代前期には京都のお盆を象徴する精霊行事となつて続けられてきただけに、関係者には伝統の形に近づけたい思いがある。昨夏の1〜6点の点火に対して「従来の文字や形との違いに戸惑った」「お精霊さんに申し訳なく感じた」との声もあった。このため、コロナ禍の落ち着きを前提に「テレビなどで見ると、文字が分かる程度には火床を増やせないかも検討したい」と話す関係者もいる。

(秋元太一、日山正紀)

2021.7.10 朝刊 京都新聞

波紋

新型コロナ・京滋

京都のお盆の代表的な伝統行事「五山送り火」(8月16日夜)について、各保存会で行く京都五山送り火連合会は9日、昨夏から2年連続で火床への点火数などの規模を縮小して行うと発表した。新型コロナウイルス禍に対する異例の措置だけに、感染状況の落ち着きを前提に、伝統の形に近づけるよう昨夏より火床数の増加を検討する保存会